会議録　令和８年度第１回市川市博物館協議会

日　時：　令和８年８月６日（木）　１４：００～１６：００

場　所：　市立市川歴史博物館２階講堂

出席者：　博物館協議会委員　１２名

＜文化財課＞品川次長、小笠原課長、大塚自然博物館長、
増田考古・歴史博物館長

【考古博】　松本副主幹、領塚主任、高橋副主幹、
峠越主任

【歴　博】　小野副主幹、山岸主任、青野主任

【自然博】　金子主任、稲村主事

発　言　者	【内　　容】
	＜事務局より＞ ・　委嘱辞令交付、委員の紹介 ・　事務局職員の紹介
松田委員長	はい、松田でございます。本日も皆様どうぞよろしくお願いいたします。 それでは早速議事に入っていきたいと思いますが、その前に、会議の成立、又、会議の公開について、事務局よりご説明をお願いします。
事務局	本日の出席委員数でございますが、田岡委員、石垣委員より欠席とのご連絡を受けております。従いまして、現在、12 名の委員にご出席をいただいております。市川市立博物館の設置及び管理に関する条例第 12 条第 2 項において、会議は委員の半数以上の出席と定められておりますことから、本日の会議は定足数に達しております。また、会議の公開についてですが、本日の議題については、個人情報等の非公開情報が含まれて

事務局	おりませんことから、市川市審議会等の会議の公開に関する指針第６条に基づき、本日、『公開』とすることと考えております。以上でございます。
松田委員長	はい、有難うございます。それでは、今、いただきました説明に基づきまして、本日のこの協議会は、『公開』とすることでよろしいでしょうか。委員の皆様方。
各委員	異議なし。
松田委員長	はい、それでは、『公開』と決定いたしました。傍聴を希望される方はいらっしゃいますでしょうか。
事務局	傍聴を希望される方はございません。
松田委員長	はい、承知いたしました。それではこれより、議事に入っていきたいと思います。市川市博物館協議会を開会します。 議事次第がお手元にあると思いますが、ご覧いただきますとおわかりいただけるように、報告事項が１件、協議事項が１件、そして、その他に３件あがっております。これに沿って、協議会進めていければと思います。 それでは最初に、報告事項ということで、議題の１ですね。「令和７年度事業実施状況に対する自己評価について」のご説明を、事務局よりお願いいたします。
松本学芸員	考古博物館の松本から、考古博物館の報告をさせていただきます。例年どおり、全て仔細に渡りまして説明申し上げるのではなく、特徴的な出来事を中心にですね、報告させていただきたいと思います。 １枚目左側に大きなまとまりが提示されてございます。まず、収集保管及び調査研究事業でございますが、上から３つ目、３項目、博物館資料の管理につきまして、市史編纂を近年までずっと携わっていたことから資料がたくさん集められて増えております。そこで、令和７年度につきましては、館内の整理、それから収蔵品の管理、台帳化などは控えまして、令和８

松本学芸員	年度以降に再開することとさせていただきます。ここでは自己評価を『C』とさせていただきました。なお、既に令和８年度に入っておりますが、市史関連資料の返却ですとか、併せましてですね、開館して 50 年以上になりまして、だいぶ散らかっておりますので、清掃や整理を併せて始めたところでございます。 続きまして、その２つ下、文化財担当関係調査でございます。昨年度の協議会でも小笠原課長からご報告申し上げましたが、市を挙げての大型イベント『国府サミット』、あるいはその関連事業である VR 映像の制作などにつきまして、当館学芸員が中身の細部に渡りまして文化財グループの業務を補助したということで、ここでは『A』とさせていただきました。その他にも、曽谷貝塚や下総国分寺などの史跡保存活用計画につきましては皆様のお手元にその概要版をご用意いたしましたけれども、こういった部分でも貢献しましたので、『A』ということにさせていただきました。 続きまして下の方、展示事業でございます。展示事業上から２段目常設展示解説につきましては、残念ながら解説させていただいたお客様の人数がだいぶ減ってしまいましたので、『C』というふうにさせていただきました。恥ずかしながら、約半分に減ってしまったということで、これにつきましては、実は右側にも書いてございますが、後にですね、歴史博物館が小学３年生を対象とした『昔のくらし体験』というのを開催しております。 そういった昔のくらし体験でクラス数の多い学校が来ますと、その一部が考古の方へ回って、それに対して子どもたちに説明していくという事業がかつてあったのですけれども、ここ数年は学校のカリキュラム等々ですね、変わったということと、あと歴史博物館がなるべく歴史博物館館内で子どもたちに説明をしたり、体験をしたりという授業をしていくという方針に変わった

松本学芸員	ものですから、これについては、多少人数が減ったということに影響があったかなというふうに思っております。一応、今年度につきましては、改めてもっと積極的に声掛けをして、課題の解消に努めたいと思っております。 次のページに参ります。教育普及事業①全市民対象ということで、一覧にしております。そうですね、このページだけですね。いくつか新しい事業もありますが、上から２段、失礼いたしました。真ん中あたり、夏休みスタンプラリー、これにつきましては一昨年度大きく減少いたしまして、自己評価『C』になったかと記憶しております。少し令和７年度につきましては持ち直しまして、前年度３割近く減少したところ、逆に２割ほど戻しまして、ややテコ入れした効果があったかなと思っております。令和８年度につきましても同等のですね、成果を目指したいというふうに考えまして活動しているところでございます。ここでは一応、かなり戻したということで、『A』とさせていただきました。 次のページに参ります。教育普及事業②学校連携、そして下段には、③地域連携とさせていただきました。③の真ん中あたりですね、地域まつりへの出張展示、解説体験等でございます。ここ数年、積極的に活動が地元の方々を中心に盛り上がっております「曽谷縄文まつり」、あるいは私が担当しております「市民まつり」へ出店を、昨年度令和７年度も実施いたしました。何度か申し上げておりますが、こうした外へ博物館主催ではない場にですね、私たちも積極的に出ていきたいという姿勢を、ここ数年ずっと持ち続けております。今年度以降も積極的に出ていきたいというふうに思っております。『A』とさせていただきました。 最後のページでございます。運営です。運営につきましては、下から３段目施設の維持管理、ずっと施設の老朽化が考古は課題になっておりました。そこでですね、修繕を積極的に行っておりました。予定どおりトイレ

松本学芸員	やエアコンの改修を終了し、お客様をお迎えしやすくなったかと思います。 実は令和８年度につきましても、次年度への課題等の欄に、エレベーターの修繕は次年度に実施すると書いてございますけれども、つい先週かな、無事にエレベーター修繕も終わりまして、だいぶ施設の不具合改修ができているということでございます。以上、考古からの報告させていただきました。
山岸学芸員	では続きまして、歴史博物館から報告させていただきます。歴史博物館の山岸です。歴史博物館も考古博物館と同様に全てではなく、何点か重要なところを取り上げて報告させていただきます。 報告の前に２点修正がございますので、修正をお願いいたします。まず歴史博物館の報告の２ページ目の１番上ですね。常設展示のところの入館者数がちょっと間違っていましたので、こちら 13,659 人ではなく、21,381 人になります。あと、もう１点、5 ページ目ですね。１番最後のページの③地域連携のところで空欄になっている行徳まつりの出張展示ですね。そちら空欄の部分に『B』と入れていただきたいと思います。以上となります。修正お願いいたします。 では、１ページ目からご報告させていただきます。収集・保管及び調査研究事業の１番上と３番目併せて報告させていただきます。収蔵資料の調査研究、整理及び維持管理とそのデータベース化ですね。こちらに関しては、年間、未整理資料等を含めて 500 点以上を再整理する、あと、データベース化するというのを目標にしていまして、これに対して、館蔵資料の古文書類で言えば 1,000 点程、民俗資料を 110 点を再整理しました。これに伴いまして、古文書の方は目録をエクセル化しまして、さらに民俗資料につきましては、収蔵番号の確認と調査を行い、番号が無い資料の台帳登録等を行いました。これにつきましては、次年度も引き続き

山岸学芸員	実施していく予定です。 　では２ページ目。展示事業につきまして、２段目の『昔のくらし』につきまして、『発見・体験　昔のくらし』、小学校３年生の学習単元に合わせた展示ですが、今年度は 18 校の小学校に来ていただき、また合わせて、全体で一般のお客様も含めて、全体で 7,000 人以上の人に来ていただきましたが、前年度に比べて会期が１週間短くなっており、また、学校もインフルエンザのために来れなくなった学校もありましたため、前年度よりかは、入館者が少々減少しています。 　続きまして、下から２段目、企画展示「本山桂川と閑話叢書－刊行から100年展－」という展示を行いました。こちらは、和歌山にある南方熊楠記念館の依頼により実施した展示になります。市川市にゆかりのある民俗学者である本山桂川の展示を行ったことにより、本山桂川の親族や研究者の方々が来館してくださいました。また、関係論文が掲載された館報も持ち帰れるようにしたところ、たくさんお持ち帰りしていただきまして、展示につきましても好評でした。こういった関係各所と、引き続き連携した展示が行えていければと思っております。 　続きまして、３ページ目の教育普及事業の①全市民対象のものになります。真ん中あたりの昔のくらし等の体験講座では、竹の水鉄砲作り、和綴じ本作り、子ども１日学芸員などを実施しました。こちら前年度までは夏休み期間中に昔の洗濯体験というものを行っていましたが、屋外で行う体験のため、最近の酷暑では、やはり体験者も実施する側も辛いということで実施を取り止めまして、代わりに人気のある竹の水鉄砲作りを２回に増やしました。また、新たに子ども１日学芸員というイベントを実施し、キャプション作りやバックヤード見学などを行いまして好評でありました。次年度への課題としましては、イベント３件を同時には申し込めない仕組み

山岸学芸員	になっていたので、こちらを改善いたしました。今年度の事になりますが、今年度はもう募集を締め切っていまして、竹の水鉄砲があと１回残るのみになっているのですが、こちらもイベント３件同時に申し込めるように改善してあります。 　続きまして、次のページの②の学校連携ですね。これは下から２番目、國學院大學と協定を締結したということで、この協定は博物館における資料保存活用や人材育成、人的交流に関することについて連携・協定するもので、11 月 11 日に協定書に基づき協定を締結いたしました。この協定に基づき、収蔵庫整理事業などを実施していく予定です。今年度、ちょうど今、國學院大學の学生さんが来ていまして、今まさに隣の明かりの部屋や特別展示室等で収蔵庫整理を実施しているところです。また、こちらの協定が 11 月に締結されたのですが、それに先立ちまして、７年度の６月にそれ以前から締結予定に基づく連携事項の一環として実施した通常の館務実習とは異なる特別実習というものを実施しまして、収蔵庫整理を行いました。その収蔵庫整理に伴う報告展として、『見つめなおす市川の宝物』という展示を行いました。同様に今年度も行っておりまして、今、１階の常設展示室の季節の展示コーナーで同様の展示を行っております。 　では次のページ。③地域連携ですね。地域まつりへの出張展示ですね。こちら 10 月 26 日に行徳まつりが行われまして、こちらに参加いたしました。博物館の広報と紋切りあそびを実施いたしました。オリジナルの紋切りとして、常夜灯の紋様の紋切りを行ったところ、とても好評で、また、南行徳公園で行ったのですが、博物館自体を知らないという地域の方々が多かったので、ここで行ったことによって良い博物館の宣伝になったと思われますので、次年度以降も参加して広報する予定です。歴史博物館からは

	以上になります。
金子学芸員	それでは、自然博物館から令和７年度事業実施状況評価について報告させていただきます。学芸員金子です。よろしくお願いします。 全体的な項目だけは考古博物館、歴史博物館と同じですので、この中で自然系の博物館ならではというか、独自の事業がございますので、そこに絞って説明したいと思います。 １枚目の１番左、事業名が並んでいますが１番下のところですね。 事業名　長田谷津に関する調査、環境改善、絶滅危惧種保全などという事業があります。目標、または予定の項目には、国絶滅危惧種スナヤツメについて市民参加の保全活動を行い(10 回参加予定)、学芸員による保全活動をするとなっております。実施及び達成状況としては、スナヤツメ・レスキューとして市民参加の保全活動を行った。実施 8 回、雨天中止２回、参加 17 人、ごく少数のスナヤツメの生息を確認したが、繁殖行動は確認できなかったとなっています。評価が『C』で、評価根拠のところは　繁殖行動が確認できなかったことは前年度より個体群の状況が悪化していると推測でき、取り組みの成果が挙がっていないと思われるというふうになっています。 この次のページにも渡って、いくつかの絶滅危惧種の保全活動などをやっております。ここのスナヤツメ・レスキューというふうにここで出てきましたけれども、前年度までは教育普及活動として、一般の市民参加の普及活動という位置づけをしていたのですけれども、前回の時にも少し触れてご議論いただいたのですけれども、やはり、絶滅危惧種の保全は何人参加したとかそういうものではなくて、保全出来たか、出来なかったかが重要なものですので、ボランティアの力を得て保全をするというふうに趣旨を明確化しまして、教育普及活動からこちらの方、資料収集・保管及び調査研究事

金子学芸員	業の方に移しております。 評価が『C』になっているんですけれども、これは博物館の活動がダメだったから『C』という『C』ではなくて、スナヤツメが『C』なんです今。もういつ滅んでもおかしくないという状況なので『C』ということです。逆に言えば、いつ滅んでもおかしくない『C』の状況だから、保全活動をするともいうことができます。これが仮に『A』になったらやる必要がなくなるということです。 そういう意味で評価が『C』になっております。 なぜ博物館が野外で野生生物の保全活動をするかというと、自然系の場合は、野外に出て植物を採集する、あるいは昆虫を採集する、採集したものを博物館で標本化し、それを博物館資料として収蔵庫に収蔵するというのが基本のフローとなっております。そして、収蔵した資料を基にそれぞれについて調査を進める、あるいは、それら標本を展示するという流れになっておりますから、野外の自然環境が豊かである、つまり生物多様性が高ければ、それだけ収蔵資料も豊かになる、収蔵庫も多様性が高くなるということですので、野外の生態系を保全することがそのまま博物館資料の充実に直結をしておりますので、野外の方に打って出るという言い方が良いかどうかわかりませんけれども、そもそもの大元のところの保全に関わっているということです。 スナヤツメに関して言いますと、近年になってスナヤツメが２種類に分けられたので、長田谷津にいるスナヤツメがどちらの種類なのか区別したいんですけど、あまりに少なすぎて１匹採ることですら憚られる状況なので、採取して標本を作って、種類を確定することすら今出来ていない。だから、『C』評価なのですけれども、これが『B』になり、『A』になる中で、きちんと収集し、博物館資料として収蔵し、その標本を研究調査することで、種の確定も出来るというような、そういう流れになっています。

金子学芸員	これが１枚目スナヤツメ、２枚目ホトケドジョウあるいはカワモヅク、アカガエル、ヘイケボタルなどというように、いくつかの生物について上がっております。ニホンアカガエルについては沢山今いますので、評価が『A』であるとか、ヘイケボタルなどは現状維持なので『B』というふうになっております。なので、博物館活動そのものの評価とは毛色が違う感じになっております。 今、ご報告したような形で前年度まで教育普及事業だったものが資料の収集・保管の方に移っておりますので、自然博物館の年間の事業計画も少し変わりましたので、修正したものをお手元に配らさせていただきました。併せて、自然博物館での学芸員の解説活動の写真も用意しましたので、お手元の２つの資料につきまして、学芸員の稲村の方から説明させていただきます。
稲村学芸員	学芸員の稲村です。お手元の写真資料をご覧ください。 当博物館では、特別展示室で生きた生き物を展示しています。その中で、ナナフシモドキの解説風景という写真があるんですけど、これは非常に珍しい昆虫で、普段メスしかいない昆虫でたまにオスが見つかっています。日本の歴史でオスは今までで数十匹だけ見つかっていて、当館の展示の目玉になっています。展示を始めたのが３月からなんですけれども、すごい動物園が人気になったタイミングで、すごくたくさんのお客様がいらっしゃいました。その際に積極的に展示室に立って、本物を交えながら解説をすることによって、非常に高い教育普及効果を得たと思っています。また、そこで常連の来館者の方を得ることができたので、また後日来てくださるという循環が　出来ております。 もう１つ、下の 15 分ミニ解説というものなんですけど、今年度から長田谷津散策会のタイミングで、展示室で 15 分ミニ解説、そのまんまですね、15 分間の解説を行っています。これ写真の真ん中にモニターがある

稲村学芸員	と思うんですけど、モニターを使って、事前に自然博物館の学芸員が撮影した動物の映像を使って解説をします。また、金子が鳥の剥製を持っているのが見えると思うんですけど、収蔵庫から収蔵してある剥製を持ってきて実際に見せています。これは、展示室で 15 分間やっていて、見に来た人が気軽に入れるようになっているので、事前申し込みとかもなく、どんどん気軽に来れるような形になっています。あともう１つ強みとして、博物館が動物園の中にありますので、このように実際に解説した動物を、そのあと動物園で本物を見ることが出来たりとか、近しい動物と比べるなどして、より高い教育普及効果が得られています。以上です。
金子学芸員	写真の資料は、お客さんがぱっちり写っちゃっているんですけれども、特に許諾を取っていないので、この場限りの資料ということでお願いします。自然博物館からは以上になります。
増田館長	私からは３館の総合評価についてご報告いたします。 はじめに、評価基準についてですが、昨年度、委員の皆様より、評価方法について、定量評価ばかりでなく、定性評価も組み込んだほうがいいのではないかというご意見をいただいております。 今回の評価に間に合うよう、評価基準の見直しの検討を行ってまいりましたが、改正には至らず、改正の内容を前回の協議会におきまして、皆様にお示しすることができませんでした。現在の検討内容につきましては、このあとその他の中の項目で、改めてご説明させていただきます。評価基準の見直しについては、今後、皆様よりメール等にてご意見をいただき、第２回協議会において、最終案をお示しさせていただければなと考えております。このことから、今回の評価基準につきましては、例年同様の評価基準での評価となっております。 それでは、お手元の資料 令和７年度事業実施状況に対する外部

増田館長	評価をご覧ください。３館からそれぞれ自己評価の説明を行いました。 　各館毎に自己評価をした中で、６つの項目について総合的に判断し、自己評価とさせていただきました。 　簡単に説明いたしますと、まず、収集・保管及び調査研究の成果といたしまして、調査・研究の部分では、考古博物館では前年度に引き続き、曽谷貝塚や下総国分寺などの史跡保存活用計画を作成したことや、またＶＲ映像制作の指導などを行ってまいりました。また、自然博におきましては、先ほど学芸員がご説明いたしましたとおり、国や県等の絶滅危惧種等の調査・研究に努めております。また収集・保管の部分では、歴史博物館におきまして、古文書資料の整理やデジタル目録の作成をすすめております。同様に、自然博物館の方でも資料の整理や台帳の電子化をすすめ、データのラベル付けが進むとともに、図書台帳を作成し、一部 web 公開を行いました。このような点については非常に評価できると考える一方で、膨大な量の資料整理は、今後も継続していく必要があり、達成率ということを考えますと、90%以上というような評価はしにくく、総合的に判断いたしまして『Ｂ』といたしました。 　次に展示についてです。展示は、収蔵資料や博物館の研究成果などを発表する場でもあると考えております。考古博物館、歴史博物館におきまして、前年度同様、数多くの小企画展等を開催いたしましたが、来館者数を比較いたしますと、大幅な伸びには至っておりません。課題といたしましては、やはり、しばらく大きな展示替えができていないことが、影響しているのではないかなと考えております。一方、自然博物館におきましては、目標の来館者数には達することはできませんでしたが、学芸員が展示室やフロアを移動し、積極的に来館者とコミュニケーションを図り、わかりやすい解説に努めるなど、大変評価できると考えております。このこと

増田館長	から３館合わせまして、こちらも評価を『Ｂ』としております。 次に、市民向けの教育普及についてです。考古博物館におきましては、下総国府や北下遺跡のＶＲ映像をゴーグルで視聴することができるようにしたほか、夏休みには子供向けスタンプラリーを開催、体験学習や、歴史博物館とともに開催した、歴史セミナーや縄文体験フェステイバルなど市民が歴史に親しめる環境をつくっており、大変好評を得ております。また、自然博物館においても、長田谷津散策会を複数回開催しており、広報や web サイトの活用などにより、見込み以上の多くの方が参加されております。このことから、大変評価ができると考え、『Ａ』としております。 次に、学校関連の教育普及についてです。市内小中学校からの依頼による出張授業や体験学習指導などは、学校の授業と密接に関連しており、市川市の歴史や自然について学んだり、さらに、理解を深める機会となるものと考えており、協力してまいりました。しかしながら、達成度という点では、学校からの依頼によるところが大きいことから、総合的に判断し、『Ｂ』といたしました。 次に、地域連携の教育普及についてです。こちらは公民館や市民団体からの要請を受け、講座や講演会などで講師を務めたり、また、地域のお祭りに参加することで、市川市の歴史や自然について知る機会を提供していると考え、協力してまいりました。しかしながら、こちらも学校連携と同様、依頼によるところが大きいため、総合的に判断し、『Ｂ』といたしました。 最後に、運営についてです。各館ともに、博物館だよりや年報の発行、また、市広報紙などで、博物館の活動を PR しております。また、予算の範囲内にはなりますが、博物館運営に必要な設備の維持管理を行い、安定的な運営に努めていることから、評価は『Ｂ』といたしました。以上で

増田館長	ございます。
松田委員長	はい、ご説明有難うございました。考古博、歴史博、それから自然博と３つの館のそれぞれの昨年度、令和７年度の事業実施状況、及びそれに対する自己評価の説明をしていただきまして、その後、３つの館を合わせた総合評価についての説明をしていただきました。 それではここからはですね。委員の皆様方より、ご質問・ご意見等を伺ってまいりたいと思います。評価『B』とか、『A』とか、『C』とか、こちらが妥当かについてのご質問は、これは協議事項の際に伺いますので、今は報告事項のところでございますので、説明に対しての評価 ABC では無く、実際に事業昨年度やってみて、ここの部分はどうであったのかとか、先ほどの説明ではこう言っていたが実際どうでしたか、あるいは説明がなかったけどどうでしたかのようなことを軸に、ご質問・ご意見をいただければと思います。 それでは、どなたからでもご質問、ご意見があればご発言ください。 はい、では谷畑委員お願いいたします。
谷畑委員	谷畑です、よろしくお願いします。各館からいろいろ細かく説明していただいて、皆さんがんばってらっしゃるなということがよくわかったんですけれども、歴史博の方で、インフルエンザなどで学校が来なくて入館者数が減っているというのが説明でありました。考古博の方でも、常設展で入館者が半分に減ったというふうなお話が確かあったかと思うんですけれども、これもそういう、インフルエンザとかそういうものの影響が考古の方にはあるんでしょうか。
松本学芸員	考古博物館がお答えします。先ほど申し上げましたのは、展示解説が大幅に減ってしまったということでございまして、入館者が半分になったというそこまでの内容ではございません。インフルエンザの影響で、歴博が減った

松本学芸員	分より考古には回ってこなくなったという影響はあったと思います。
谷畑委員	有難うございます。すみません、ちょっと勘違いしておりました。ここ来る前に大体いつもちょっと自然博の方は行ってないんですけれども、歴博と考古博と大体見せていただいてから会議に参加しているんですが、なんかちょっとショックな事が１つありまして、私も来館者としての目線で入ってくるんですが、同じように展示見てて、歴博の展示を「おもしろかったね」というふうに親子連れで見ていただいて、そのあと、子どもが「上もあるよ」とお父さんに言ってたんですけれども、「上は同じだからいいよ」と言って、上に行かなかったんですって。もうちょっと、こう何か上に行くような工夫とか、こう何というか、上もちゃんと面白いよというのがこう、看板のどこかにそんなに遠くありませんとか、そういうのがあるとちょっと足が運ぶのかなと思って、ちょっとすごくびっくりしたので、私、考古と歴博はどっちも必ずセットで行かなければ、古い方から新しい方、あるいは新しい方から古い方に見ないと駄目だと思って必ず２つ見てるんですけれども、一般の人から見たら、歴史も考古も同じという意識がどうやらあるようで、もうちょっと推した方が、やっぱり上にちょっとあがっていただくのは手間かもしれないんですけれども、非常に何かもったいないなと思ってちょっとびっくりしました。 それと歴博の方で、海苔下駄が出ていて、あれ、今回新しく出ていたと思うんですけれども、そういうのもちょっと、何かこれ推しですというふうにみたいにポップを入れていただければ、もうちょっと皆、前からあるように皆さん見ていたのですけれども、これ、今回初めて出ているんだよと私はちょっと心の中で思っていたのですが、それをもうちょっとアピールするといいのかなと個人的に思いました。
松本学芸員	委員長、よろしいでしょうか。
松田委員長	はい。お願いいたします。

松本学芸員	有難うございます。実は数十年来、考古の入館者数が歴博を上回ったことはおそらくないんじゃないかと思っています。僅か１分の坂道なんですけれども、歴博もそこそこボリュームがありますので、そこで満足してお帰りになって、まあ、めんどくさいからいいや。上は、というそういう状態が、ずっと続いているということです。何もしなくて手をこまねいていたわけではなくて、「徒歩 1 分坂の上考古博物館」という古い看板がかつてありました。それでは目立たないし、実は柱から取れてしまったので、今日皆様お帰りになるときに歴史博物館を出て、駐車場の方面を見ていただくと緑色でおっきなですね、サインが「坂の上考古博物館」かなり目立つように作ってはいるんですが、15 年前くらいでしょうか。残念ながら必ずしも効果的ではなかったといいましょうか、結びついてはいない状況です。やはり、その僅か１分であっても移動しなくてはならないという衝撃が大きいのかなと感じています。
松田委員長	はい、有難うございます。谷畑委員からは、具体的にこうしたらいいんじゃないかというようなことを含めて、ご質問、又はご意見をいただきました。 その他にご質問やご意見ございますか。藤村委員お願いいたします。
藤村委員	藤村です。教えていただきたいことがあるんですけれども、考古と歴史の教育普及事業学校連携のところに、小・中・高校生調べ学習指導というのがあるんですけれども、具体的に、どのくらいの年齢のお子さんがどんなことを訪ねてくるのか、いくつかちょっと具体的に教えていただきたい。
松本学芸員	考古で申しますと、夏休みの宿題を学校に出すのにあたり、曽谷のちょっと遺跡名は失念しましたが、この遺跡の近所に住んでいて、現在、その遺跡の発掘調査がなされている。それで、その遺跡に興味を持ったのですが教えてください、というお問い合わせをいただいたことがあります。 実際、その遺跡のその地点ではありませんが、近隣の別地点を私、発掘調査を担当したことがありましたので、文化財グループ、実際に発掘

松本学芸員	調査をしました担当者にその現場の地点の状況を聞きつつ、自分の以前の調査成果なども併せて、「ここはこういう遺跡だよ」「これは竪穴住居跡だね」「こんなふうにこの村は栄えたんだね」というふうに子どもと保護者も当然見えましたけれども、相談を受けながら学習の役に立つ助言をいたしました。一例ですが、申し上げます。
山岸学芸員	歴史博物館ですと、考古と同様に夏休みに学生が来ることが多いですが、その中で過去にあったのが、中学生のあっちの、東京の中学生の方でしたが、学校の課題で自由な課題だったんですけれど、学校で日傘が禁止されていることに対して、傘の歴史について、傘といっても手で開くタイプの傘、雨傘とかではなく、頭に被る菅笠などの傘など、そういった昔から日除けのために使っていたもの、としての傘の歴史を調べて、それを自分でまとめ上げて学校で発表して、学校で表彰されたという報告までは受けております。そのような調べ学習を歴史博物館で対応をいたしました。以上でございます。
藤村委員	有難うございました。
松田委員長	他に質問やご意見ございますか。滝口委員お願いします。
滝口委員	歴史博物館の方にご質問なのですが、まず１点目として古文書についてですが、再整理というのがどういう形で進められているのかというのを伺いたいのと、古文書に関しまして、古文書講座というのがありますけれども、こちらに実施回数とか、応募人数とか、難易度再現度とありますが、どういうふうにお考えになっているのかということと、それから３点目としましては、収蔵資料の民具の整理をされてきたものを中間報告的な形で今も展示をされてますけれども、リーフレットの部分はけたという話ですが、実際のお客さんの反応といいますか、地域の方の反応といいますか、そういうのはどんな感触なのか、そのあたりをちょっとお伺いしたいです。

山岸学芸員	では、古文書の整理からお答えいたします。古文書の再整理というのが昭和の旧目録が作られた時代に収集された資料で、まだ酸性紙封筒に入っているものがありまして、中身もさほど読んでいなくて表題と、あと年号も詳しく書いていないような状態で収蔵されていますので、こちらの酸性紙封筒から取り出しまして、中性紙の封筒に詰め替えるという作業をしています。その際に、表題であるとか、中身の内容ですね。そういったものを詳細に書いて年号もきちんと書く、取る。そして、エクセルに入れていくという作業をしています。また、古文書講座につきまして、こちらは、古文書を初めてやる人向けの講座になります。全３回やっているのですが、実際に講堂でやっておりまして、テキストとして館蔵資料の基本的に１枚ものの読みやすい資料の写真をお渡しして、加えて、崩し字事典から出てくる崩し字をピックアップしたもののコピーを渡して、ちょっと見ながら読んでみてくださいと時間を取った上で、実際にじゃあ読んでみましょうといって崩し字を板書しながら、例えば、『候』という字は元々は楷書で書くとこうですけれど、崩していくと、だんだんこのように崩れていきますという崩し字の崩れ方を教えるという講座をやっておりました。募集人数は 20 名程度にしていて、今回は 30 名近くいたんですけれど、年によって本当に集まらない年と集まりすぎる年があったり、今までは往復はがきのみなどにしていたのですが、せっかくなので、LoGo ホームという Web から申し込める方法で募集するように。また、難易度は初級編だけでしたので、今後、中級編の講座を増やすかどうかも考えているところであります。 最後に展示事業の収蔵庫整理展、こちらの地域の人の反応ですが、この際やったものが海苔道具に関してなのですが、この時、展示していたのが海苔切りをするための飛行機包丁であったり、ノリスであったりなのですが、地域の人の反応というと、あまりちょっと直接的にアンケートなどで聞い

山岸学芸員	たことがちょっとまだ無いので、私が展示室にいたときにじっくり見ている人の反応を見てみると、やはり市川市で海苔を作っているとあまり知らない人が多いので、結構、小さい子どもに、これで海苔を昔作ってたんだって、親御さんが子どもに説明している様子などを見ることが出来ました。以上です。
滝口委員	有難うございます。今伺って、古文書の封筒の入れ替えはどこの博物館でも中性紙封筒に入れるのが急務で、特に中性紙封筒は高いですけれども、なるべく早めに進める方がいいと思います。 古文書講座なんですけれども、大体少し読めるようになると、その先が読みたいという人が必ずたくさんいまして、そういう人を拾うにはワンランク上の中級編というのがですね、おそらくあった方が根付いてやってくれる人が増えると思います。実際にいろんな館の例で、そういう中級くらいのレベルの人がさらにもっと読みたくなるという人を今度拾い上げて、ボランティアさんにしたりとかですね、そういう、こう資料整理の手伝いをしてもらうとか、そういう方向に発展できるというのもあるので、ここはもう少し、ちょっと仕事が増えてあれなんですけれども、やっていただくといいんじゃないか思いますし、これだけ人数直近でもいらっしゃるということは、必ずその先があるはずなので、そういうふうに思いました。 それから、民具のこの展示ですけれども、ああいう道具を地味な道具で、結構、今博物館でも捨てられがちなんですが、ちゃんと整理をすると、こういう意味があるんだというのをですね。定期的に展示で発信されるというのはすごく大事なことだと思います。ただちょっと、こう発信力が足りないといいますか、ちょっと一角で、ちょこっとやってるぐらいだと認知されているのがどれくらいなのかな、というのは正直、ちょっと心配なところがあってですね。せっかく地道で大切なことをされているので、できればある程度まとまったら、少し大きな展示をされるとか、ゲームもあっていいと思いますし、それから、

滝口委員	古文書とかもそうですけれども、説明を実際に、このギャラリートークみたいにしてくれるとですね。よくわかるけれども、ただ見てと言われると、うーんで終わってしまう人が結構多いように思います。そういうのを考えると、時々はギャラリートークみたいなことをですね、積極的にやっていただくと、もうちょっと発信力というか、そういった理解してくれる人が増えるんじゃないかと思った次第です。以上です。
松田委員長	滝口委員、有難うございます。滝口委員のご専門、又はご経験に即した直接的に参考になるご意見を含めた質問だったと思います。私もこの収蔵庫整理の下で見て参りましたし、この取り組みとても良いなと思っておりました。確かに、少し発信力が弱いというのは谷畑委員からの意見にもありましたが、もう少しパンチがあってもいいのかなっていう気はします。 この取り組みのとても素敵な所は、國學院大學の観光まちづくり学部ですか、そこの学生さんを入れてやっている、即ち、若い方々の感性がそこにはおそらく発揮されていると思いますので、場合によっては、その情報発信においても、彼らの方がいろいろ最近のデジタル的な方策を知っているでしょうから、そういうのも入れてもいいのかなとちょっと感じました。 他にご意見やご意見ありますでしょうか。 それでは宮﨑委員、それから大橋委員の順番でお願いいたします。
宮﨑委員	先ほど歴史博物館のところで、行徳まつりへ出張展示というのがあって、そこで、南行徳公園でやっていたら知らない、博物館を知らない人がいたということで知らないと当然行かないし、その辺で呼ばれて行徳まつりに行ってますけども、今後、そのまつりにこっちの方からやりますよというようなお考えがあるのかということと、今の発信でかかるんですけれども、夏休み前に例えば、小学校中学校の先生に今度こういうことがあるよって必ず終業式の時に言ってもらうとか、そういう発想はないでしょうか。

山岸学芸員	行徳まつり、そうですね、市の中で行徳まつりに出展しませんかという案内が来て、それで令和７年度は初出展しようということで参加した次第なのですが。確かに南行徳という場所ですと、さらに浦安寄りというか、あの地域の方々は博物館に行くんだったら浦安の博物館に行くというパターンの方々が多い印象でした。実際に行ってみて、全く博物館に興味が無いという人たちじゃなくて、本当にただ知らないという方々が多かったので、何かしら行徳の方面の公民館の方にですとか、そういったところにもっと案内のチラシだとか、パンフレットとかをもっと置けるようにしたら、もうちょっと認知度が増えるのかなと思っていますが、今後も、もっともっと行徳の方々にも知ってもらえるように何かしらの方法で広報していきたいと考えております。ちょっと、方法について検討しなければならないとは思っております。
宮﨑委員	あと、市の広報とつながった方がいいんじゃないかな。博物館だけでやっていると、やっぱり限度があるんじゃないかなと思うんですけれども。
松本学芸員	考古博物館松本が１点お答えします。毎年夏休み前、７月第 3 週号広報いちかわでは、博物館はこういうイベントをやります。ぜひ来てくださいという箱記事、囲み記事ですね、を用意しておりまして、広報いちかわでは、一応ぜひ博物館、考古歴史に来てくださいというご案内はしております。ただ、さすがに学校への全子どもたちに伝えるのと比べると弱い側面はあろうかと思いますが、その辺は広報いちかわ以外でもですね、SNS 等、あるいは Web 等での発信は、今後も強化していきたいというふうに思います。それからあとは、これは今年度の事業計画にはありませんでした、学童、放課後保育のプログラムに考古で急遽、着手しまして、この夏休みにですね、夏休みは半分終わったのですが、放課後保育の 12 ヶ所合計 800 人の子どもたちにワークショップをしていただいております。その際に、考古歴史博物館のリーフレットを持参し、終わりごろにですね博物館もっと

松本学芸員	楽しいイベントをいっぱいやっていますから、ぜひご両親に相談して行事をやっている日に遊びに来てくださいというふうに声掛けは、今、心がけております。何とか私が体験してもらった子どもたちには、何とか参加してくれるのかなと期待しております。直接、一度ワークショップを楽しんでもらってますので、いっぺんにただ紙を配るというよりは効果的かなというふうに思っています。以上です。
松田委員長	有難うございます。では、大橋委員お願いいたします。
大橋（愛）委員	大橋です。いつも有難うございます。自然博物館の皆様にご質問なんですけれども、スナヤツメに関してとか、このカワモズクとかそういったことに対して、子どもたちが目に触れるような機会というのはあるのでしょうか。というのも、私、稲越小学校という小さな小学校、すぐそこの学校にいるんですけれど、そこの子どもたちが本当に虫とか生き物が大好きで、教室の壁に『生き物飼い過ぎ注意』というポスターが貼られるくらい、本当に大好きなんですね。で、そういった子たち、本当に学校に来る度に大きなこんなカエルを持ってきたりとか、ヘビ連れてきたりとか、そういった子たちが多くて、校庭にも『ムシムシランド』というところがあって、去年、セアカゴケグモが出てしまったせいでそこがちょっと伐採されてしまって、すごい鬱蒼と茂った森みたいなところが禿げてしまって、皆『ハゲハゲランド』といってすごい悲しがってたんですけれど、そこで何て言うんだろう、小さい虫とかそういったものを採取してくるのが大好きで、それについて図書室で調べたりとかそういったこともすごくしていて、たぶんそういった子たちには絶滅危惧種という言葉をもう何て言うんだろう、すごく興味を惹かれるいいワードだと思うんですね。そういった子たちが、こういった何て言うんだろう、市民参加の保全活動とかをやっているということを知ると、もっと興味が持てて、お猿さんだけじゃなくて、動物園行ったらこういった自然博物館のところに寄って、こう

大橋（愛）委員	いったものがいるということをすごく理解して皆で支えていこうって、市川市の環境を良くしたら、もっと虫たちや動物たちが元気になっていくんじゃないかと思ってくれるのではないかと思ったのですが。すみません、前置きが長くなってしまったのですが、そういったところはどうなのかなと思いました。
金子学芸員	絶滅危惧種の保全活動自体は、ちょっと子どもにはハードルが高いので、ほぼ肉体労働みたいな感じで大人の力が必要なので、現状は大人主体、高校生、大学生の参加はあります。 それとは別に、ウチの博物館は、ともかく生きているものの展示がめちゃくちゃあって、この写真の資料でも上の写真、稲村が話して説明している後ろ側とかにも水槽が写っていますし、下の写真の間仕切りの向こう側の部屋のところですね、水槽がぶわっと並んでいて生物がたくさんいるので、生きている昆虫とかをたくさん見れるところということはかなり周知されていて、理解されていて、市内の小学生とかもいっぱい来ています。 動物園の周りで、一部昆虫採取がＯＫなエリアも作ってあるので、知っている子たちは、カブトムシとか、ノコギリクワガタとか、オニヤンマとかを自分の網で捕まえて持って帰るというような形のこともやっています。子どもたちは、特に３歳、４歳、５歳ぐらいは、動物園の動物飽きちゃうんですよね。距離遠いし、むしろ、ウチの部屋で昆虫を見たり、カエルを見たり、カマキリがバッタ食べてるところを見て、おぉーとか言ってますから、そんな方が年齢的に合うので、親が、パパママがパンチ君の動物園行こうよと言って来て、子どもが飽きちゃったときに暑いしインドアのところに行ったら、カブトムシ、自由に触れるコーナーが今作ってあるので、カブトムシ触れちゃったとかっていうような形で、動物園と良い循環を今作っています。子どもの距離で見れます、触れますみたいなものは、常時、提供しています。 それが、市内の子どもたちに伝わっている子と伝わってない子がいる。

金子学芸員	さっきの南行徳の話じゃないですけど、確かに、行徳の小学校に行って、自然博物館はパンチ君で有名な市川市動植物園の中にありますと言っても、それってどこって言います。さっきの話で言うと、動物園は上野動物園なので、行徳の方にとっては。なので、ちょっと南側には伝わってないんですけども、ＳＮＳなどからも発信をする形で市内に特化してというよりは、市内の人も含めて幅広く周知活動をしていくことで、市内の小学校の子どもたちも見に来てくれるのかなというようなそういう形でやっているところです。
大橋（愛）委員	有難うございます。
松田委員長	有難うございます。その他に、山田委員お願いいたします。
山田委員	山田です。私は、最近漁港というか海の方の方々、漁師さんとかと連携した取り組みをしているのですけれども、今、こう絶滅危惧種とかでいろいろなお話を伺ったりしておりましたり、出たりしましたが、川の魚とか、陸地の生物の話がよく出てきたなと思ったんですけど、一方で、海苔もそうですけれども、干潟のことも少し触れていますけれども、市川漁港の朝市に先週の日曜に行ったときに、魚の漁獲高がすごい減ってでですね、漁師さんとか組合長さんがすごく危惧されてたんです。というので、この会議に今、出たところ、生物って海もそうだよなとちょっと思った次第で、私の見当違いかもしれないんですけれども、海の方の生物というか、その自然博物館の方でどう捉えて活動されているのでしょうか。
金子学芸員	海に関する評価といたしましては、市川市の海の生態系、海の自然のある場所として江戸川放水路を特に位置付けておりまして、ここに関しては、かなり詳細な解説を Web の方に展開をしています。展示室の中でも１コーナーがあって、ネットにあるレビューなんか見ると超深堀り解説なんて書いてくれていますけど、本当に超深堀りの解説をしています。

金子学芸員	生物についても、江戸川放水路のトビハゼですとか、カニとか、海の生き物も飼育展示はしています。 ただ、例えば江戸川放水路の絶滅危惧種に準ずるトビハゼなんかの保全の場合は、博物館単体で何ができるわけではなくて、あそこは国交省の管理で河川区域なので、当然そういう他の行政機関を巻き込んだ形で全体で連携して活動しないと何もできない。ヒヌマイトトンボも同じなんですけれども、そういう面がありますので、そちらに関しては、あくまでも目視調査とかカウント調査に留めておいて、過去には国交省の会議に参加したりしたこともありますし、そういう形で枠組みがあれば海の方の自然に関しては保全であったり、調査であったりというのに関与できるかなと思います。立地が大町にありますので、陸域がベースになってますけれども、海域に関しても必ず関わっていきます。 インバウンドのお客さんが今すごく多いわけですけれども、タカアシガニのこんなに大きい剥製を飾ってありますけど、欧米系の人はものすごい興味を。なんであんなにカニが好きなのかわかんないですけど、すごい独特のリアクションをしてくれます。そんな感じで、小さい子もカニは大好きですから、海の方とも縁を切らずに続けているところです。
山田委員	有難うございました。さっきのお話や議論を聞いていると、行徳は東京の方を向いているからとか、なんかいろいろ話があったんですけど、確かにそうであると思うけれど、なので、であればむしろ、なおさら陸地の方で行徳とか、そういう東京湾の海の紹介をしたりとか、ていうこともなんかあってもいいのかなと思いました。有難うございます。
松田委員長	山田委員、有難うございました。その他に、ご意見やご質問ございますでしょうか。では私の方からもいくつか発言します。 まず、歴史については、先ほど滝口委員からご指摘があったとおりだと

松田委員長	思います。収蔵庫整理展、本当に良い取り組みだなと、新しい風が入ってきたなと感じております。 考古の方では史跡の保存活用計画、今回は曽谷貝塚のものありますが、これらの策定、お疲れ様でございました。これは作成するのが大変なんですよね。私も、これまでに５つほどの保存活用計画の策定に関わってきましたが、曽谷貝塚でこの計画をまとめあげられたことはとても大きな成果だと思いますし、確か、記憶が間違いでなければ、曽谷貝塚に焦点を当てた活動を今年度やる予定になっていましたということで、そちらにもうまく繋がると思います。また、『国府サミット』というのもやってらっしゃいましたので、これも良い取り組みだと思いました。 考古博のところなんですけれども、２ページ目の考古博の『オータムフェスタ』のところで、基本的に評価が『B』が多い中で、『A』とか、『C』があると、必然的に我々もちょっと意識して見てしまいます。『C』となっているところは、評価根拠で人数が減ったというふうに根拠を具体的に書いた方がいいかなと思いました。周知方法が『要改善』ということは分かったのですが、歴博さんの方は確か人数が減ったとか、何か書かれていたと参加者が少なかったとありましたので、考古博でも『C』とした理由を具体的に書かれた方がいいかなと思いました。これは単に記載の方法のお話です。 それと、考古博の修繕が無事に昨年度予定どおり進んで、またエレベーターも先ほどの話ですと、今年度ですけれども、先週終わったところという話でした。ちょっとインフラの老朽化が気になっておりましたので、これは無事に終わってよかったなと感じました。 自然博については、少し気になったことがあります。スナヤツメの保全活動については、先ほどのご説明でスナヤツメ自体は個体数が増えていないということで、『C』にしたということだったんでした。

松田委員長	そのようにとらえることも出来ると思うのですが、博物館の事業評価にて、その考え方でいいのかなとちょっと気になりました。 館が保全活動を十分にやったかどうかではなく、個体群の状況が良くなった、悪くなったで、『A』『B』『C』をつけてしまうと、それは事業評価として適切なのか、少し気になりました。『A』になれば保全活動をやらなくてよくなるというお話しも、確かに個体群が増えた、減ったかが基準であればそれでいいと思うんですけれども、ここで見ているのは事業評価ですので、その基準でいいのかなというのは個人的に引っかかったところです。 そこで、ちょっとお尋ねしたいのですが、これまでもそのようにして評価をつけてこられましたでしょうか。私の質問はこの１点だけですが、そこをちょっと確認させていただければと思います。
金子学芸員	絶滅危惧種の保全活動、特にスナヤツメ・レスキュー、ホトケドジョウ・レスキューなどは、前年度までは教育普及の方に入っていたので、実施予定回数がどれくらいこなせたかとか、参加者数がどれくらいいたのかということで、参加者数が少ないという点で、『B』なり、『C』なりの評価がついておりましたが、絶滅危惧種を保全するのに参加者は多い少ないは関係無いでしょという、逆に言えばそういう話をして、むしろちゃんと結果が残せたかどうかだよねということなので、こちらの教育普及から資料収集の方に引っ越してきた経緯があります。例え、参加者が３人であっても個体群が回復すれば『A』だし、参加者が 100 人であっても滅びれば『C』である。 スナヤツメだとわかりにくいんですけど、ホタルだととてもわかりやすいと思います。ホタルがきれいで、お客さんが楽しめば『A』だと思います。ホタルが少なくて全然きれいじゃなかったよねとなれば、博物館が何回も努力、いろんな活動をしていようが、やっぱりそれは一般の市民の方は評価されない。もう駄目だよね、ホタル観賞会駄目だよねみたいな感じになってしまうの

金子学芸員	で、これは関わるこちらの気持ちとしてもがんばったから『A』とかではなくて、やっぱり、生き物が増えたか増えてないかで評価をしたい思いがあるところです。
松田委員長	はい、今の説明はとてもわかりました。明快だと思いました。ということは、絶滅危惧種の保全自体を自然博物館のミッションというか、目的に掲げているという理解でよろしいでしょうか。
金子学芸員	とてもグレーゾーンで難しいんですけれども、博物館法には、野生生物の保全とかは書いてないですし、当然条例にも出てこないので、なぜ博物館でボリュームを大きく取って、こういう項目を今回出しているのかというのは、先ほども説明したように、自然系の博物館というのは、過去の資料も大事ですけど、今とこれからの資料が大事なので、生物多様性を高めることイコール、博物館資料の充実となる。歴史系でいうと、遺跡の正しい保全とかと同じことなんだと思うんですけれども、やはり、生物多様性を高めることが博物館資料の充実、あるいは豊かな展示、そういったものにつながっていくので、現状はこういう形で取り組んでいます。ただ、これが市川市の自然博物館としての業務として確固たるものかと言われると、現場の判断に寄っているところが多いので、なかなか今のご質問に関して明快に答えづらいところがあります。 市川市の枠組みでいうと、生物多様性を高める業務は別の部署がやることになっているんですけれども、やはり目の前に壊れかけている自然があり、今、手を差し伸べれば何とか維持できます、でも、手を差し伸べなければ間違いなく滅びますという２択を問われているので、その２択の中で、博物館という業務の枠の中で、できる限りのことをやっているということを理解していただければありがたいです。
松田委員長	承知いたしました。今のご意見について、反対する委員や市民というの

松田委員長	はほとんどいないと思います。ただ事業評価ということで、ここは確認する必要があるかなと思いましたので、議事録にこれが残れば良いと思いますし、ひょっとしたら、こういったことも博物館の行うべき活動のミッションに入れるための新たな方向性を、市川市が自然博物館で先んじて行っているのかもしれません。そこは、確かにちゃんと記録として残すことに意義があるかなと思います。そのような現場の判断で今回評価をしたということで、記録が残れば良いと思います。そこには私自身も賛成するところです。 はい、長々と失礼いたしました。他に、ご質問やご意見ございますでしょうか。無いようでしたら、そのまま評価のところにも入っていきたいと思います。皆様方で、今回３つの館のそれぞれの事業の『A』『B』『C』の自己評価ということでつけてらっしゃいます。また、それらを統合した形での総合評価というのも、同じく『Ａ』『Ｂ』『Ｃ』で、『Ａ』と『Ｂ』ですね、こちらの、出ておりますが、何かこちらについて気になる点、あるいは評価を変えた方がいいのではないかといったご意見ございますでしょうか。 はい。では櫻庭委員お願いいたします。
櫻庭委員	歴史博物館の収集保管及び調査研究事業ですね。先ほど何人かの方からもお話がありました収蔵庫資料の調査研究、整理・維持管理、資料、及び写真のデータベース化ということで、歴史博物館の館報ですね。これの 32 ページから福島学芸員が書いた作業報告というのがありますけど、これですね、実は博物館友の会で 4 月の友の会の総会で、４月 15 日ですね、これで福島学芸員の方からテーマとして、ここに書かれている内容について詳しく講演をしていただきました。その中で、実は冒頭書かれる、ここにありますように、歴史博物館では民俗の学芸員が長らく非常勤ということで、中々収蔵庫整理が実は継続してできなかったという経緯があったということです。それを今度はですね、國學院大學の学生の

櫻庭委員	観光科の方も含めて、今回ようやく手についたという報告がありました。 その成果が 36 ページの写真、画像があるとおもいますけど、バックヤードといいますか、収蔵庫に押し込められていたような状況だったのがきれいにですね、全て運び出して、清掃して、測定・記録、またあの収蔵庫のですね、稼働できない固定された収蔵庫だというんです。そのために、１回押し込んだら２度と戻せないというものに対して、整理し直したということでちゃんと押し込める状態じゃなくて、こうたぶん戻すというのは以前とは違う戻し方だそうです。押し込んであったものが、詰め込んであったものが、ちゃんと持ち運びできるような形にしたということだそうです。大型資料が２段３段積みにしてあったものがちゃんとわかるようにしたということです。 その成果報告の様子というのが、このように『市川の宝物』というふうに成果が出たということで、これは相当な何と言いますか、熱量と言いますかが、激情と言いますか、力を出したと言いますか、単にデータベース化だけのものじゃないものであったことから、私としてはここではですね歴博『Ｂ』『Ｂ』となっていますけれども、『Ａ』に値するものだと思っています。今までほとんどできていないものができるようになったということと、かなり整理が進んだということで、ですから、１番の収集保管及びってことで、歴史のこれは『A』になることで、総合評価も『A』じゃないかと私は思っています。以上です。
松田委員長	有難うございます。総合評価の１番上の項目、収集保管及び調査研究の真ん中の歴史博物館の『Ｂ』を『Ａ』にするんではないかということでした。民俗資料の方の整理は、展示の方で歴史博は上げていたと思うんですけれども、総合評価でいうと、上から２段目の展示のところで定義しているが、展示のみならず、そもそもの資料の保管や収集状況の改善も大幅に進んだということで、のこの１番上の収集保管及び調査研究も『A』にしたらいいんじゃないかという櫻庭委員のご意見でした。

松田委員長	いかがでしょうか。私も話をお伺いして、友の会で、近くで見てきた櫻庭委員の今のご意見はとても説得力があるように感じられましたが、委員の皆様よろしいでしょうか。今のご提案にご賛同いただけますでしょうか。はい。田畑委員お願いいたします。
田畑委員	そうなりますと、歴史博物館さんからいただいている、このホチキス留めの資料の資料保管及び調査研究事業で、『B』『Ｂ』『Ｂ』『Ｂ』となっているわけですけれども、これの１番上のところが『A』としたとしても、館別自己評価を『Ａ』にするためには、全体的に『Ａ』になるなり、複数、3 つくらいを『Ａ』にしないというような気がするのですが、いかがでしょうか。
松田委員長	なるほど。この歴史博物館の１枚目が『B』『B』「B」『B』で、全体を『A』にするためには、１番上を仮に『Ａ』にしたとして、『Ａ』『Ｂ』『Ｂ』『Ｂ』であるから総合『Ａ』にすることは、まあ不可能ではないと思いますけど、もう１個くらい『A』が要るんじゃないかということですね。
櫻庭委員	データベース化が『A』と、私さっきお話ししました。
松田委員長	データベース化、即ち、歴博の１枚目が現状『B』『B』『B』『B』を、『A』『A』『B』『B』にしても良いんじゃないかというお話でした。確かに、最初のご説明で年間 500 点データベース化となっているところを 1,000 点目録を作成と書いてありましたので、聞いたときは、『B』は控えめだなと思わなくもなかったんですけれども。 他に何か、あるいは、田畑委員ご意見ございますでしょうか。もし、『A』『A』『B』『B』にすれば、確かに総合評価のところでも、収集保管及び調査研究事業のところでも、歴博『A』にも出来るかと思いますが。それでは、同じようなことを私から１点、考古博に関して申し上げます。 そのことを踏まえて、櫻庭委員の今の提案にもう一度立ち返りたいと思います。

松田委員長	考古博物館のですね、ホチキスこの留め資料の１枚目を見ておりますと、収集保管及び調査研究事業が、上から『B』『C』『B』『B』『A』『B』『B』になっています。総合評価の方を見ると、『A』になっておりまして、ちょっと、ここの整合性が取れていないような気がしました。これは先ほどの田畑委員の指摘と似ているのですが、各館の個別の評価と総合評価、若干ズレがあるような気がした次第です。同じことが考古博物館のホチキス留め資料の１枚目の裏の教育普及事業①全市民対象のところでも言えまして、パッと見ますと、大体『B』で、『A』と『C』が１個ずつあるのですが、総合評価の方を見ますと、市民向けの教育普及の考古のところが『A』となっておりまして、ここもズレているのかなと思いました。ここちょっと評価の話ですので、差し支えなければ考古博・・・はい。お答えいただければと思います。
増田館長	はい。まず、考古の収集保管及び調査研究につきましては、確かに、『A』が １ 件、『B』が ５ 件、『C』が １ 件という形になっているのですが、すべての項目が同じボリュームかというと、そうではないのかなと考えております。曽谷貝塚や下総国分寺などの史跡保存活用計画などを作成したり、こういった作業量とか、内容を考えますと、こちらは相対的に『A』ではないかなと考え、こちらを『A』にしております。 同じように、市民向けの教育普及全市民対象、こちらにつきましても、確かに『C』はあるもののですね、様々な取り組みをしている中で、個々には確かにそれぞれの評価で行きますと、『B』が全体の70～80%程度のものかもしれませんが、少ない人数の中で、様々な取り組みをしているということで、『A』に評価をしております。以上でございます。
松田委員長	はい、ご説明承りました。そのとおりですし、各項目が同じウェイトということでは全くないと思いますので、それでも説明は通ると思うんですが、

松田委員長	パッと見た時に違和感を覚える点ではあるかもしれませんので、ひょっとしたら、今年度はこれで良いのかもしれませんが、次年度以降は、もう少し整合性を取った方がよいのかなという気もしました。 だんだんと思い出してきましたけど、総合のところの評価基準と個別館の評価基準がズレてるか、という話が以前にあったような気がしていて、それが「その他」のところで、基準を変えねばならないという話につながったのかもしれません。評価基準がそもそも、総合のところと個別館の評価のところで違うのであれば、これでも良いのかもしれません。すみません。また長々と話してしまいました。 ともあれ、考古の方は承りましたので、それでもよいかと思いますが、この点で他に何かご意見委員の方からありますでしょうか。 では、山田委員お願いいたします。
山田委員	はい。今、『A』『B』『C』の数で話をされていて、被るかもしれませんが、自然博物館のところの展示のところで、４ページ目のところですか、お話、さっき説明聞いた時に展示解説のところで、ナナフシモドキの飼育の解説とかを写真まで添えて、人も多く集まっている中で熱心にされていたなというのがありましたので、そこで見ると、『B』『B』『B』『A』なので、『B』が数だけで見ると多いのですけれど、私は、『A』評価でもいいんじゃないかなと思いました。以上です。
松田委員長	有難うございました。即ち、総合評価の自然博の展示の項目の自然博のところ、『B』ではなくて、『A』でも良いのではないかという話ですね。承知いたしました、ということで、修正提案、即ち、今回、事務局から出てきた評価の自己評価案を変えるべきだという提案が、今、２つ出ていることになります。いずれも総合評価のところで、総合評価でいうと、まず、繰り返しになりますが、歴史博の収集保管及び調査研究を『B』から『A』

松田委員長	にしてはいかがという話。それに伴って、個別評価の歴史ですね、の１枚目のところ、現状『B』『B』『B』『B』を、『A』『A』『B』『B』にしては、というご提案だったんです。そして、今、山田委員から出てきたのは、総合評価の展示の自然のところを『B』から『A』にしてはという話でした。このあたりいかがでしょうか。委員の皆様からはご提案があったわけですけれども、よろしいでしょうか。はい。桜庭委員お願いいたします。
櫻庭委員	先ほどから評価のズレって言いますか、その辺がですね。例えば、実際、繰り返しになりますけど、お話を聞くとか、それをね見るとかでないと単純にこの数字っていいますかね、先ほど田辺委員からもおっしゃられたように、これだけを見るとね、単純になぜ『B』『C』があるのに『Ａ』になるのかとかね、そういうふうになってしまうんですよ。で、実際は先ほど館長からお話があったように、ボリュームであるとか、熱量であるとか、力量であるとか、相当なものを実際に見聞きしてる、わかっている人はね、わかっている。その辺のたぶんズレがあると思うんですね。委員の方はね。単にこれ『Ａ』がね、『Ｂ』と『Ｃ』だけしか並んでいないのに、何で『Ａ』なのとかね、しか思わないんですよ。だからその辺のズレを何か補正というか、そういう意味で意見をね、私からも述べましたし、いやそうじゃないんじゃないのという形で、その辺のね、ズレを何かこう直すようなものというかね。例えば、『Ｂ』＋『Ａ』だとかね。そうなると面倒くさくなっちゃうんですけど、そうしないと単純にこう見ただけだと、たぶんね。このズレがそのままになっちゃうのかなというふうに感じました。見聞きした人がね、何でこれ『Ｂ』なの、何でこれ『Ｃ』なのということで、何でこれ『Ａ』じゃないのといった形で。
松田委員長	櫻庭委員、有難うございました。本当におっしゃるとおりだと思いました。 しかもですね、なぜこうなっているのというのも実際に聞いてみると説明があって、そのとおりだなというふうに納得するところです。このあたりは少し

松田委員長	歯がゆい点ではあるんですが、しかし、一方で、行政的にはある程度資料の中の一致もあった方が良いと思います。 これは、今、何か解決できることではないと思いますので、次年度以降、少し意識していただければ良いのではないでしょうか。そして、今回出た提案につきましては、他の委員の皆様から反対意見が無いようであれば、友の会で身近にご覧になってきた櫻庭委員のご提案、また、先ほどの自然博の話は熱量を持って伝わってくるような話だったと思いますので、山田委員のご提案を受けて修正するということで進めてよろしいでしょうか。 それでよいのかなと私自身は感じた次第ですが。よろしいでしょうか。 では、ご提案どおり 2 件修正にするということにしましょう。結果的には全部少しちょっと評価が良くなるということで、悪い話ではないと思います。 また、資料の中での『A』『A』『B』『B』というのは、外から見た時にあまり大きくズレていると、あれっと思われると思いますので、次から評価を作成するときには少し意識していただけばと、そのようにまとめたいと思います。 その他にご意見ご質問ございますでしょうか。はい。宮﨑委員お願いいたします。
宮﨑委員	自然博の先ほどの繁殖についての基準なのですけれども、協議じゃなかったので言わなかったのですが、繁殖をするかしないかって人間の力、最終的なものじゃないと思うんですよ。だから、そういう環境を作れたかどうかって、確かに見学者が多かったか少ないかっていうのは、それはあまり関係ないと思うんですけど、繁殖に関しては。その環境を作れたかどうかがっていうのが大事なんじゃないかなって思うんですよ。だから、『C』というのは、あまりにも自分を卑下しているような感じがしてですね。何か違うんじゃないかなと思うんですけれど。
櫻庭委員	結果論じゃないですね。その辺ね、がんばったかと。

金子学芸員	学芸員は国家資格ですので、国家資格を持っている専門職が取り組んでいる以上、結果を出して当然というのが私の認識です。
櫻庭委員	結果論にね、何か違和感を感じるんです。どれだけこれだけがんばったのにね、なぜ『Ｃ』評価なのか。
宮﨑委員	自然は不思議なものなんで、こうなってこうなったらこうなるでしょ、ていう全部割り切れるわけじゃないと思うんですよね。だから、ちょっと『Ｃ』はないんじゃないかなという想いです。
金子学芸員	さっきも例えましたけど、ホタルで例えればわかりやすいと思います。ホタル観賞会に毎年大勢の人が来て、10 年前はもっときれいだったよねとかっていう話がいっぱい出れば、何でホタルが減ったんだよ、誰のせいだよ、何で元に戻せないと展開になりますので、それでいえば、やっぱりホタルはちゃんと飛んでいないと、市民の方は許してくださらないと、そういうところです。
松田委員長	有難うございます。プロ意識に感銘を受けているところでございます。 委員としては、もう少し評価してもいいんじゃないかというところですが、館としては、より高みを目指した活動をしていきたいという、その心意気のようなものが我々には伝わってきました。この点も含めて、しかし、本当に忌憚のない意見交換ができていることは良いことだと思います。 はい。その他にご意見やご質問、これだけは言っておきたい、何か今日はとてもこうフランクな意見が出ていていいと思います。これ、やはり形式的な協議会であるよりは、こういうふうな活発な歯に衣着せぬというか、発言があった方が良いと思いますので、今日は良い会だなと個人的には感じております。はい。では山田委員お願いいたします。
山田委員	はい。何かフランクな会って言ったので、ちょっと。今の私も、ご指摘でぐるぐる回ってしまうんですけれど、詳しく説明の紙を見ると、確かに国家資格を持つ専門家の方がやっているのはわかるのですが、市民参加の保全

山田委員	活動を行い、参加者が 32 人集まっていただいたという取り組みは、どこかで何か救いたいなというか、評価した方がやっぱりいいんじゃないかなと思っちゃったりしましたというか。というか、何でかというと、例えばこれが歴史の博物館とか、考古博の方とかのときに、なんか、こう市民を巻き込んでいろんな活動をたくさんされてたけど、結局なんか、そのものがというか、その保存とかするようなものが、なんかちょっとこう、うまくいかなかったから、そのやり方そのものが良くないみたいな感じになっちゃうのが良くないしと思ったので、なんかその、そこはちょっと継続で支持されるのかわからないですけれども、なんかこう認めていただければと、ちょっと思った次第です。
松田委員長	はい、では田邉委員お願いいたします。
田邉委員	ちょっとフランクな。やっぱり私も、例えば博物館の展示とかも、内容的にはものすごく素晴らしいけれども、一般受けはいまいちで、入館者数が伸び悩んだみたいなことって、よくあることだと思うんですね。それと、やっぱりよく似ていて、ものすごくがんばってはいる。いろんな取り組みして参加してくださる保全の取り組み、取り組んでくれる人はいっぱいいる。けれども、結果としてはうまくいかないみたいなところで、今は生息、繁殖が確認できなかったっていう面で、だけでの評価になっているじゃないですか。 でも、やっぱりそのたくさんの方が活動に参加してくれてるみたいなところは評価していい部分だと思うので、そこら辺の事も合わせて、何か評価出来たらいいんじゃないのかなというふうに思いました。
松田委員長	はい。大橋委員お願いいたします。
大橋（弥）委員	すみません。何も言ってないの、自分だけかなと思ったので、評価基準のことについて、その他にあるのかなと思ったのですが、皆さんそうかもしれないですけど、キジュンというのに『規順』ていうのと、それから、基本の基の『基準』があるじゃないですか。『規順』というのは小学校の頃、今言われて

大橋（弥）委員	いて、『規準』て何かというと物差しなので。だから、その『規順』は質、だから、がんばってるっていうことも『規順』だったら、たくさんの『A』がもっとつけられる。でも、ここに書かれている『基準』ていうのは、基本の基をもとにしている質とかの線引き、昔、皆さんは私より若いから違うかもしれないですけど、５が何人とか、１を１人つけなきゃいけないというその中で線を引くっていうのが、基本の基の『基準』だったところで、そこの評価がちょっと一致してない部分があって、こういうお話になっているのかなと思いながら、だから、ノリジュンの『規準』だったら『A』がたくさんになるってことで、ちょっとだけ意見を申し上げさせていただきました。以上です。
松田委員長	有難うございます。おそらく、今日今出た意見を受けて、昨年のこの事業評価を変える必要はないと思うんですけれども、次年度になって、今年度の評価をするときにちょっと意識していただければと思いました。 先ほどのご説明を聞いていても、これまでは教育普及に入れていたのを動かしたという話もありました。『基』準というのは、より良いものがあれば動かすこともたしかに可能です。一方で、長期的な変化を見ていくためには、あんまりコロコロと変えてもいけないという、ここら辺が中々バランスが難しい点なんです。 今回、出てきたお話は、本質的なものだと思います。個体数や繁殖が確認できるかどうかということ、これは本来の基準かもしれませんが、それに加えて、参加者がいっぱいいたら、万が一、個体が大きく増えずとも、市民の意識が高まったなどの別の評価ができると思いますので、多角的な評価の在り方ができればいいんじゃないかなという気がしました。 繰り返しになりますが、今回の昨年度の評価はこのままにしていいと思いますが、これから評価をさらに精緻にしていくために、今後、事務局で下案を作っていただくときにも意識していただきたいですし、我々委員も意識して

松田委員長	意見述べられたらいいのかなと思いました。 ちょっと無理やりでございますが、何とか進行ということで以上のようにまとめさせていただけましたら、幸いでございます。 その他、評価に対してのご意見、フランクでいろいろ出ましたけど、これでよろしいでしょうか。これは言っておきたい等もしございましたら、お願いします。 それでは、①の議題と②の協議事項は、これで終了とさせていただきます。よろしいでしょうか、有難うございます。 それでは、2.その他に進みたいと思います。 まずは、博物館事業実施評価　評価基準の見直しに係る課題の検討について。先ほどからでている話にも発展するかと思いますが、説明をお願いいたします。
小笠原課長	はい、文化財課長の小笠原でございます。３館に関わることですので、私の方からご説明をさせていただきます。 昨年来、評価基準については、様々ご議論いただいているところではございます。その中で、昨年度の内容も踏まえて資料に沿った形で、簡単にご説明させていただければと思います。資料、博物館事業の実施評価評価基準の見直しにかかる課題の検討についてという A4、１枚の資料になります。 評価基準の課題としまして、昨年度ご指摘された内容について、（1）から（3）まで整理させていただいております。 （1）といたしまして、『A』評価についてですけれども、「参加者数、内容、満足度全てにおいて見込み以上の成果」とするとしている一方で、「90％以上」と「見込み以上」という表現と「90％以上」というところの表現に矛盾が生じているというご意見をいただいております。（2）といたし

小笠原課長	ましては、３館共通の見解を設ける必要があるということで、館と館ごとにバラバラではいけない。（3）といたしましては、定量評価は参考としては必要だが、定性評価に重点を置くことも考えられる。そういうふうな方向に振り切った博物館もありますよというようなご意見もいただいているところです。 定量評価と定性評価につきまして、１度、整理させていただきました。 ご説明させていただきますと、定量評価につきましては、数値で測れる成果を評価する手法で、定性評価につきましては、数値化できないプロセスや行動態度を評価する指標ということで、数値目標を大事にしているところなのか、プロセスを大事にしているところなのかというところが簡単にいうと両者の違いです。 ２としまして、定量評価と定性評価についての比較を改めてさせていただきました。 それぞれのメリット、デメリット上げているところですが、定量評価、こちら数値目標の方ですけれども、そちらにつきましてのメリットとしましては、客観性と公平性、誰が評価しても結果が同じになりやすく、評価のブレが少ないですとか、納得感、明確な数値基準があるため、結果に納得しやすい。モチベーションの向上、目標達成までの進歩が分かりやすく、成長した実感を持ちやすいなどのメリットがあるとされています。一方で、定性評価につきましては、多角的な評価としまして数値だけでは捉えきれない、貢献度など目に見えない内容も評価できると。あるいは、プロセスを評価、成果が出なくても取り組みの姿勢や改善に向けた努力を評価できる。 ３つ目としましては、人材育成に直結ということで、目標までの過程で生じた課題を見つけやすく、具体的なフィードバックを通じて成長を促しやすい。といったメリットがあるとされています。

小笠原課長	一方で、それぞれのデメリットとして、定量評価はプロセスや努力が評価されにくいということ、結果だけを見るため、そこに至るまでの過程や工夫などが評価対象外となることがある。２つ目としましては、数値化できない業務への不適合、成果を数字で表しにくい内容では指標の設定が難しい。 ３つ目としましては、モラルハザードのリスクということで、数字を追うあまり、不正や短期的な成果のみを優先する行動に走るおそれがある。 一方で、定性評価につきましてもデメリットございまして、評価者によるバイアスということで、資料にも書いてありますが、評価者の価値観や好みが反映されやすく、評価基準が曖昧になる傾向がある。２つ目としましては評価の手間と負担、プロセスを詳細に観察・記録する必要があるため、評価者に大きな負担がかかる。３つ目は不信感の発生ということで、評価基準が見えにくいため、結果に納得できない場合があるといったようなデメリットがあるとされております。 このことを踏まえて、先ほどの評価基準の課題１の(1)で上げました現在の評価基準の矛盾について整理しますと、定量評価の 90%という表現と定性評価の全てにおいて、見込み以上という言葉の表現に乖離が生じているということで、定量評価と定性評価がちょっと混在してしまっているような中で、この表現がそれぞれ違っていることがまず課題としてはあると考えております。先ほどのスナヤツメ・レスキューのいろいろお話も伺っておりますけれども、この中でふと思ったのは、今回あの自然博物館の方ではスナヤツメの個体数、つまり定量ですね。定量で評価しようとするばかり委員の皆さんの途中の経過、過程、努力とか見えないんじゃないかというところのその評価と乖離が生じてしまったというところがあるというところも感じておりまして、例えば、ここについては数値目標というより定性評価に振る方に、もちろん、個体が増えればそれに越したことはないかと思うのですが、

小笠原課長	それプラス活動日数みたいなものも加えて評価していく部分が必要なのかなという、そういうところの乖離もあるのかなと思っているところです。 それも含めまして、３の検討事項ですけれども、３点あげさせていただきました。今年の評価いろいろご議論いただきましたが、先ほどからあがっている課題も含めまして、改善すべき課題がどういったものであるか。あるいは、２つ目としまして、全ての評価基準につきまして、定性評価のように過程を大事にするものにすべきか、それとも定量評価も一部数値目標とするべきものも残すべきなのかどうかというところも、一応、議論の必要があるかなと考えています。 ３点目としましては、評価基準だけではなく、 評価の内容等についても見直す必要があるなど、考え方について先ほども事業評価と館別評価と総合評価の一貫性が無いというようなご指摘等もありましたけれども、その他についても、どういった考えをしていった方がいいのかといったところも検討していく必要があると、考えているところでございます。 今回の議題としてお諮りすることもできたのですが、お時間の都合もありましたことと、今回の議題を踏まえて、今回の会議だけでお話しするというよりは、今後、次回の会議で具体的にご提示する前に皆様から一旦、メール等でも構いませんので、他で思いついたことなどご意見をいただければ、次回の会議の議論に反映させていただければというふうに考えたものです。そこで、今回はその他として提示をさせていただいているところでございます。説明は以上でございます。
松田委員長	はい、ご説明有難うございます。ただいまのご説明について、ご意見ご質問ございますでしょうか。よろしいですか。 その他になっている理由も含めて今ご説明いただきましたので、今後、委員の皆様からもご意見について、積極的にメール等で事務局に送って

松田委員長	いただければと思います。 １点だけこの検討事項の(2)で気になったことで、全ての評価基準を定性評価のみとすべきかというのは、急に反対方向に一気にもっていくということで、どう見ても行き過ぎていると思います。 いろんなところの行政評価をやっていますが、一般的には定量評価が主体で、しかし、それだけではカバーしきれないのを定性評価で拾うというのが行政評価の手法だと思います。これは個人的な意見かもしれませんが、全て定性評価にすると、かなりまたガラリと変わってくるような気がいたしました。ともあれ、ご説明いただきましたような流れに沿って進めていければと思いました。 続きまして、その他の２つ目、博物館基本的運営方針についてのご説明を事務局よりお願いいたします。
小笠原課長	引き続き、すみません。文化財課長の小笠原でございます。 昨年度、正確に言うと、令和６年からご議論いただいている運営基本方針の見直しについてですけれども、前回の内容で博物館協議会の皆様からはご了解いただいたというところでございまして、その内容を踏まえて、教育委員会内部で上層部の方に一旦ご報告させていただきました。 その中で、前回の協議会の方では定例教育委員会議の方でお諮りして変更しますとお話しさせていただいたのですが、その一歩前段で、社会教育員会議の方にも一旦、報告してほしいという話がございまして、それを踏まえた上で、定例教育委員会議にかけることになりましたので、改正の方はこれからということになります。 そのため、定例教育委員会議に諮る前に社会教育員会議を諮るのですが、年２回ほどしか開催をしておりません。今年はまだ開催されていないので、開催され次第、定例教育委員会議にお諮りして、改正していきた

小笠原課長	いと考えているところでございます。以上でございます。
松田委員長	ご説明、有難うございます。こちらの博物館基本的運営方針について、何かご意見やご質問ございますでしょうか。 では無いようですので、次に進みたいと思います。最後、その他の最後の案件は、次回協議会、開催日程等についてです。 では、事務局より ご説明よろしくお願いいたします。
事務局	次回の協議会の日程につきましては、例年どおり、令和９年３月頃を予定しております。改めて、皆様にご連絡をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。以上でございます。
松田委員長	はい、承知いたしました。皆様もよろしいですね。 それでは一旦、用意した議題は全てカバーしたことになります。何か委員の皆様から全体をとおして発言しておきたいことがございましたら、お願いいたします。よろしいですか。無いようでしたら、これをもちまして、本日の協議会は全て終了となります。時間内に収めることが出来ました。皆様のご協力に感謝申し上げます。 本日は長い時間、有難うございました。 【 １６時 閉会 】